

寺尾 俊彦先生を偲んで

相馬 廣明

寺尾俊彦先生が急逝されたことを知らず、お悔やみ申し上げる機会を逸し、極めて遺憾に思っておりました。

この度、寺尾先生が育成された日本産婦人科・新生児血液学会誌に追悼文をのせていただくこととなり、遅まきながら先生のことを追想したいと思います。かつて日本産科婦人科学会での血液凝固にかかわるシンポジウムが品川教授（弘前大学）の司会で行われた時、新進気鋭の寺尾講師（名古屋大学）がシンポジストの一人として理路整然たる発表をされましたが、当時日本産科婦人科学会の主題は子宮癌の領域に集中しており、最も対峙しなければならない出血の問題にかかわる専門医が少なかった時代でした。その意味でもたれたシンポジウムの意義は大きく、当時の産婦人科新生児血液研究会の発展継続にもつながることになりました。

寺尾先生が後年浜松医科大学の助教授から教授、学長となられて、さらに日本産婦人科医会の代表者として大きな役割を演じましたが、専門領域では多くの先生方の随想がおありでしょうから、ここではそのことと違った面での先生との接点をお話したいと思います。実は寺尾先生の紹介による鈴木社長（スズケン）との出会いでした。

昭和58年10月18日、千代田区の竹橋会館で肝炎ウイルス研究財団による鈴木社長の表彰式が行われました。それはB型ウイルス肝炎の原因解明や肝炎ウイルスワクチンの開発にチンパンジーが利用されましたが、使用済みのチンパンジーの処理に困っており、相談された鈴木社長が実験済みのチンパンジーを引き受け、熊本宇土の三和化学工場に収容しました。私はこの式典で記念講演「チンパンジーのお産」を行いました。しかし、社長とともに伺った宇土の工場では、収容されたチンパンジーは狭い檻の中に押し込まれており、ストレスにより毛をかきむしり痩せた状態であり、早くこれらを新しい放飼場に移して自由な跳び廻りを味わせたく社長に進言しました。その効あり、熊本三角の山の面にチンパンジーセンターが設立されました。また社長命により、そのセンター所長の笹岡さんと私は米国のチンパンジーセンターの見学の為、アトランタのヤーキース霊長類センターやアリゾナのチンパンジーセンター、ホロマン空軍基地のチンパンジーセンター、サンディエゴ動物園などを訪れ、チンパンジーの飼育状況を視察しました。当時私は度々ネパールでの医療のために出かけておりましたが、一度ネパール行きの航空機が名古屋空港から出発したことがありました。丁度正月休みの時で着物姿の寺尾先生が名古屋駅まで出迎えに来られ、空港まで車で送って下さったこともありました。このような先生との出会いの思い出が次々と湧いて参りますが、常にバスの効いた声で構想を述べられる際、大きな体に笑みをたたえた先生のお姿に接する事がもう出来なくなりました。痛恨の極みであります。はるかに先生のご冥福をお祈り致します。